

# 土佐のわらべ

第389号 《第411回（2013. 12. 12）子どもの本の読書会記録》参加者5名・文書参加5名

## 『クリスマスのりんご』

ルース・ソーヤ、アリソン・アトリーほか文

上條由美子編・訳 たかおゆうこ絵 福音館書店

クリスマスが近くなると、街ではクリスマスの歌が流れ、活気に満ちてきます。子ども達にとってもうれしいクリスマスがやってきます。

さて、今回の本は、クリスマスにまつわる九つのお話です。どのお話もクリスマスにふさわしい内容でしたが、私は「小人とくつ屋のむすこたち」「小さなモミの木」「クリスマスのりんご」が好きでした。その中でも一番好きだったのは「クリスマスのりんご」でした。

「クリスマスのりんご」。むかし、ドイツのある町に、ヘルマン・ジョゼフという年をとった時計作りがいた。その町に住む人達は、ずっと昔からクリスマスになると、大聖堂の聖母マリアとおさな子イエスに贈り物をささげてきた。人々の間では、ほかの贈り物よりも、おさな子イエスをよろこばせるものがあると、イエスはマリア様の腕の中から身をのりだして、その贈り物をお取りになると言い伝えられていた。

ヘルマンはささげ物のできなかつた一人であったが、今年は、ささげ物とするために何年もかかった立派な時計を完成させていた。しかし、隣の子どもの父親がけがをして、クリスマスのプレゼントを買うお金がないという事を聞き、この時計を売ってしまう。「わしは、これまでだって、なにももたずにいた。」「今年もまた、手ぶらでいくしかないのだ」と、ヘルマンは二日分の夕飯のりんごを持って

大聖堂へ行った。祭壇の一步手前に来た時、人々の「奇跡だ。奇跡だ。」という声が聖堂にひびいた。おさな子イエスがマリア様の腕の中から身をのりだし、りんごをもらおうと手をのばしていた。

このお話から、人間は物だけでなく温かい心が大切であるという事を教えてもらったように思う。また、この本をクリスマスまでに1話ずつ読んであげると、クリスマスに対する子どもの世界が広がり、もっとクリスマスを楽しめるように思えた。読書会での感想は、読みやすく、クリスマスのエッセンスがつまっていて、最後まで楽しく読めたというものが多かった。

今年も、もう少しで終わります。今、子どもの本の世界を読書会のみなさまと一緒に歩めた幸福を感じています。来たる2014年も子どもの本と共に歩める事を希望し、「ふしぎなクリスマス」の中のサイモンの言葉「心配ばかりするんじゃない。なにごとも、うまくいくと信じることだ」に励まされながら、新しい年を迎えたいと願っています。

どうぞ、よいお年をお迎えください。

旧年は、いろいろありがとうございました。

Y. A